

月刊 ビジヨナリー

2011年 4 月

monthly VISIONARY

CONTENTS

- セミナー・レポート ● 新時代に入った中学入試とこれからの私学 2
- 中 学 入 試 ● 2011年度入試、キリスト教系が復活? 10
- 高 校 入 試 ① ● 2011年度 都立高校入試結果 まとめと分析 12
- 高 校 入 試 ② ● 神奈川県公立 変化は少ないが、公立志向は若干上昇 18
- 高 校 入 試 ③ ● 神奈川県私立 受験生の都内志向が弱まる 21
- 大卒の就職事情 ● 今春大卒者の実質就職率は60%以下 24

今月の夕回一ズアツブ

2011年3月卒業した君たちへ

2011年3月、日本の戦後史に深く刻まれた年に高校を巣立つ君たち。卒業式もなかった年に、あっても自分たちだけで、送ってくれる在校生のいない中での卒業式であった年に卒業した君たち。他の多くの世代が記憶を曖昧にしても、君たち自身は決してこの3月を生涯忘れることはないだろう。

テレビに延々と映し出される大惨事の模様、あってはならないはずの原子力発電所の爆発シーン……。そして遠隔地の悲惨な出来事というだけでなく、首都圏に住む君たちにももろに影響した交通事情、初めて聞いた「輪番停電」。この3月は、普段の何十倍も色濃く、いろいろな色が鮮烈にキャンパスに描かれた月であった。

それは目を覆いたくなるような光景というだけでなく、危険な業務に挑む仕事に対する責任感、被災地の人々が支えあう強い絆、遠くの人たちからの温かな支援、世界はひとつと思えるうれしい感覚、海外から称賛される日本人の高潔な人間性……。そして「買占め」。君たちが目にしたキャンパスは、普通なら目にする事のない、人生の、人間性の濃厚な絵だ。1年先輩が目にしたものとも、1年後輩が目にするであろうものとも決定的に違う。

そんなすごいものを目にした君たちだからこそ、お願いしたい。今すぐでなくてもいい。大学を出た後でも、社会人になって何年経ってからでもいい。真に強くたくましい人間になり、弱い人を支援してほしい。今回のさまざまな場面で気がついたことと思う。「偉い」ということは「地位」ではなく、その人が行った「行為」であることを。そしてもう一つのお願いは、整った恵まれた環境ではなく、「荒野」をめざしてほしい、ということだ。

私はちっぽけな人間だが、君たちの3倍も生きてきた人間として一言アドバイスしたい。

人生の充実は、どこそこに所属したから得られるというのではなく、自分自身がどのような姿勢で向き合ったかで得られるものだ、ということ。

新時代に入った中学入試と これからの私学

(3月10日 安田教育研究所「中学入試セミナー2011」より)

(株)首都圏模試センター 代表取締役	樋口義人 氏
(株)エデュケーショナルネットワーク データ課長	池田 亨 氏
(株)ユーデック 代表取締役	川東義武 氏
安田教育研究所 代表	安田 理

例年好評だった受験情報誌の編集長と安田が語る中学入試セミナーが、今年はメンバーを変えて行われた。第1部は「2011年度入試の分析」、第2部では「これからの私学はどうしていったらいいのか」、講師各氏が日ごろ考えていることを語った。

<第1部> 2011年度入試を分析する

● 2011年度入試の全体動向 (樋口氏)

2011年度入試の全体状況をお話させていただきます。受験者数は4万5,600人です。これは首都圏模試で試算した数字です。前年度が4万6,500人ですから、減少した数は意外に少なかったといえます。四谷大塚は横ばい、日能研は大きく減ったとみえています。受験率は前年の15.32%から14.87%へとやや下がっています。

問題は合格率(総定員を受験生数で割った数字)です。2009年度は90.5%だったものが、2010年度は98.4%となり、2011年度はついに104.9%と、受験生の数よりも総定員のほうが多くなりました。しかし、偏差値表で見て中堅から上の学校はいつもどおりの厳しさでした。一方で、下位の学校は入りやすかったのではないかと思います。

また、「午後入試」が増え、午後入試の全応募者は前年比7.1%増(4万5,550人)になっています。延べの実施回数は409回(全入試回の24.4%)で、特に2月1日から3日には357回(3日間の入試回の35.5%)も実施され、3回に1回が午後入試です。2月1日の同一校で午前・午後入試を実施している中学校は、東京都で76校(179校の42.5%)、神奈川県で15校(59校の25.4%)にも及んでいます。

この結果、2月1日、2日よりの入試になってしまい、それ以降の入試は例年よりボリュームダウンしてしまいました。今年は、1日、2日で実力相応の学校を堅実に受験して合格を得て、3日、4日にチャレンジした受験生(特に女子)は非常に成功しました。中堅上位校では3日以降に補充のための合格を出していったので、その影響で他の学校は苦戦されたのではないかと思います。

2012年度は、晃華学園が2日、3日、5日だった入試を1日、2日、3日に前倒しすることを発表しています。これに触発されて、他校でも入試日を前倒しし、前半が非常に窮屈な入試になると予想されます。

●学校種別動向を分析する（安田）

首都圏で応募者が増えた学校で、最大のトピックは栄東です。応募者が前年度から倍増し、7,000名超という桁外れの数になりました。これは募集定員を120人から240人に倍増したことで、受験生が入りやすくなるのではないかと判断して殺到したためです。応募者数ベスト10を見ると、埼玉の学校が半数の5校を占めています。埼玉は首都圏の先陣を切って1月10日から入試が始まり、入試期間が長く、何度も受験できることが理由と思われまます。

また、ベスト10は東京都市大学付属以外はすべて共学校です。東京では前年比で応募者が減少している学校は共学校が最も多くなりました。しかし、埼玉・千葉では応募者を増やした学校は共学校が圧倒的に多く、首都圏全体では共学校が多くなっています。

応募者数のベスト20までを見ても、女子校で豊島岡女子学園、男子校で立教新座が入っているくらいで、やはり大半は共学校です。

各県の応募者数ベスト3を上げると、

- <東 京> 男子校 東京都市大学付属、本郷、早稲田
女子校 豊島岡女子学園、共立女子、八雲学園
共学校 東京都市大学等々力、広尾学園、桜美林
- <神奈川> 日本大学、山手学院、浅野
- <千 葉> 市川、専修大学松戸、東邦大学付属東邦
- <埼 玉> 栄東、開智、獨協埼玉

となります。

このうち、東京・神奈川で午前入試だけの学校は本郷、早稲田、豊島岡女子学園、共立女子、浅野の5校だけで、応募者数が午後入試で左右されていることがよくわかります。

●入試規模から見た分析（池田氏）

先生方にご協力をいただいた入試結果アンケートから受験者数の規模ごとの集計を出してみました。規模の区分は、最も上が受験者数が1,501名以上の学校、最も下は受験者数101～300名の学校です。全体的には受験者が減った学校が多いのですが、受験者数1,501名以上の学校では合計が6万4,788名で、昨年の6万1,403名から3,000名以上増えています。一方、他の規模の学校は、すべて少しずつ減っています。これは規模の大きな学校、メジャーな存在の学校に集中的に受験生が集まっていることを示しています。各家庭が「わが子に合った学校を」という選択は基本原則ですが、実際には「みんなが行くところを自分も受ける」という状況がみてとれます。

合格者数を見ても、受験者1,501人以上の学校は2万5,277名で、昨年よりも2,400人も増えています。こうした大規模な学校の併願校になっている学校は、少なからず影響を受けていると思います。

学校規模別のデータで受験者数の増加率も出してみました。受験者が昨年に比べ

て20%以上増えた学校が24校、10~19%増えた学校が26校です。一方、10~19%減った学校は41校、20%以上減った学校が48校ありました。増えた学校は規模ごとの差は目立ちませんが、減った学校をみると、規模が小さいほど減りが顕著という傾向があります。これには、受験生規模が大きな学校は受験者が減りにくいという面もあります。

受験生が20%以上増えた学校は、共学化、新校舎、午後入試新設など“目玉”がありました。中央大学附属、早稲田高等学院など2年目の浸透があった学校もあります。一方で、10~19%の学校には特に“目玉”はありませんでしたが、地道な活動が成果を上げてきた、好感度が上がったのではないかと考えられます。これらをご勘案いただいて、今後の募集活動に役立てていただければ幸いです。

●関西の中学入試はどう動いているのか（川東氏）

孤立化した大阪の私立中学校

関西入試は12月5日の岡山の私立中学から始まり、地方の学校の出張入試があり、クライマックスが1月15日の「統一入試」になります。首都圏で言えば、2月1日にあたります。ただし、関西の1月15日は99%の学校がその日に入試を実施します。15日の受験者数を数えますと、各県の受験者数がほぼ判明します。

近年、関西圏での総受験者数は右肩下がりで減少しており、2011年はついに1万9千名を切り、1万8955名になりました。募集定員が1万9326名なので、全入時代に入りました。しかし、灘、甲陽学院、神戸女学院などの難関校は依然激戦です。ある地域以外の難関校はすべて受験者数を増やしています。そのある地域というのは「大阪」です。大阪の難関校には大阪星光学院、四天王寺がありますが、今年は両校とも受験者数を減らしました。

大阪でさらに厳しいのは「受験率」です。他府県はやや上昇か例年並みであるのに対して、大阪だけが前年比-0.7%と地盤沈下しています。大阪府は2年前に私立中学の助成金を25%カットし、来年度は35%カットと、私立学校に対して厳しい姿勢をとっています。私立高校でも以前は少ない高校で1人当たり18万円、多い学校では60~70万円の助成金が出ていました。来年度は一律28万円になります。募集に失敗すると、学校の存亡に直結する状況になっています。

他方、大阪の保護者も私立に対して非常に厳しい見方をしています。大阪府では、親の年間所得が610万円以下の世帯の生徒は私立高校の授業料が無償になります。3年間公立中学でがまんすれば、私立高校に無料で進めるという空気があります。

一方で、610万円以上の所得がある世帯は、中学受験で必ずしも大阪の私立を目指す必要はありません。このため、優秀な受験生は東大寺学園や洛南、洛星、灘、神戸女学院など、府外の学校にどんどん出て行っています。逆に、大阪の私立中学には、他府県からの受験生は入ってきません。他府県の生徒が大阪の私立中学に入っても、府民でないために高校では就学支援金をもらえません。3年後の不公平感を嫌って、他府県を受けないし、他府県からも大阪を受けないという状況で、今後、大阪で私学がよくなるのは非常に難しいと考えています。

有名私大系列校が人気

関西では兵庫も京都も公立が元気ですが、「関関同立」神話は依然として生きています。関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学にさえ進めれば、早稲田大学や慶応大学に進まなくても十分人生のキャリアプランが描ける。そのため、中学入試でもこれらの付属校は元気です。ただし、関西学院の付属は四谷大塚の偏差値で58ぐらいであるため、付属から進むよりも公立の高校に入って関西学院に進むほうがお手軽と考えられています。関関同立の付属は、52~53ぐらいでないで、「入り得」感がなく、難しくなりすぎた気もします。関関同立の付属は、中堅上位校で、その上に灘、甲陽学院、神戸女学院などの難関校がありますが、これら以外の私立中学はほぼ全校が定員割れです。

<第2部>「これからの私学」について

●これからの中学入試（樋口氏）

2012年入試は新学習指導要領「元年入試」

この4月から小学校の新指導要領が実施されます。2002年の指導要領改訂により、学習内容が削減され、公立学校への不安感が高まった結果、私立中学受験生が増えていきました。しかし、今度は指導要領が内容が増える形で改訂されます。

新指導要領になるとどうなるかを保護者は子どもを通じて実感しています。教科書、サブテキスト類はページが厚くなっています。小3・小4は死に物狂いで移行措置のカリキュラムをこなしています。今まで習ったこともない単元が移行措置で子どもたちに与えられています。公立の小学校の先生方は指導要領を消化しなければならず、子どもの理解度にかかわりなく、授業が進められています。

苦勞している子ども的一方で、親は「たくさん教えてもらっている」と喜んでいきます。

これだけ公立でもやってくれるなら、私立に行かなくても公立で十分という考えが保護者の間に浸透しつつあります。実際に、新しい教科書が配布されると、平均で25%のページ増、算数は33%、理科は37%も増えます。しかも、ページが増えた分、内容が濃い。

新指導要領の影響を最初に受けるのは、入試問題だと思います。新しい教科書には、出題のネタにできる内容がたくさん入っており、来年度の入試から問題傾向が大きく変わることが予想されます。

「強い私学」のアピールを

また、指導要領の改訂により、できる子とできない子の差が今以上に開くと考えられます。現在のゆとり教育でさえ学力格差がありますが、これがさらに進みます。塾はそういう生徒を抱えて指導し、新しい傾向の入試問題にも対処していかなければなりません。すべての点が新指導要領を軸にして変わります。

こうした新指導要領により、公立が保護者の信頼を回復する可能性があります。

公立ではなく、私立でないとダメなんだという「強い私学」を、ぜひアピールしていただきたいと思います。私立各校からは、入試はもちろん、カリキュラムまですべて見直すなど、頼もしいお返事をいただいています。

現在、来年度入試の情報が例年と比べて少ないのは、入試要項の発表を待ってこれという学校が多いためです。

私どもも「私立は大学合格実績を含めた、より優れた教育が受けられる」ということを保護者に伝えていきたいと思います。今後、カリキュラムや入試日程をどうするのか、ご検討いただき、お教えいただきたいと思います。

●いま、私立学校に望むこと（池田氏）

私学は本当に力をつけているか

昨年の夏、パシフィコ横浜で行われたスーパー・サイエンス・ハイスクールの全国発表会に行きました。全国160校あまりのうち1校だけ、ポスター発表を含めてすべて英語で発表した学校がありました。それは、横浜市立サイエンスフロンティア高校です。英語発表の理由を同校の先生に聞いてみますと、「学会発表がすべて英語だから、高校時代からその準備をする」といったお返事でした。

サイエンスフロンティア高校は公立高校再編の中で誕生した学校で、1期生がこの4月から高3です。当然、中学はありません。神奈川の公立高校入試には独自問題の制度がありますが、この学校の1期生は記号選択問題中心の共通問題で入学してきました。中学では公立中学の英語のカリキュラムです。そうした生徒たちが入学して1年4ヶ月で、英語の発表を行ったのです。

後日あった公立の合同説明会の折に、会場にいた同校の先生に「できる生徒さんを選んで発表したのですか」とお尋ねしたところ、全員そのくらいの力は持っていますとの話でした。話にいささかの誇張はあるにしても、取り組み方によっては公立中学のカリキュラムで入学してきた生徒でも英語での発表ができるレベルに持っていけるということを示したともいえます。

翻って、私学には中高6年間のカリキュラムで、教材も工夫した英語を勉強している学校が数多くあります。そうした学校が先ほどの高校のような英語力を身につけているか…。身につけていてもそれが保護者に伝わって、受験生の学校選択に生かされているか、振り返ってみていただければと思います。

改革4年目、5年目は大丈夫か

毎年シーズンになりますと、塾対象説明会や合同説明会のほか、公開授業も拝見します。その中で気になるのは、共学化やカリキュラムの全面改訂などの学校改革から4年目、5年目の学校に、1年目のエネルギーがどこに行ったのかと感じるケースがあることです。背景には、さまざまな事情があるでしょうが、改革の中だるみを避ける基礎は、「授業」であると感じています。拝見した公開授業では、有名校であっても、授業の形式は教科書を読みながら必要に応じて板書するという従来のスタイルが目立ちました。

公立では現在、高校では進学指導重点校、公立中高一貫校、小中一貫校などが進められています。もちろん、すべての公立が改善されたわけではありませんが、特定の学校に絞ってピンポイントで改善した例は目立ちます。公立が復権してきたときに、旧態依然とした授業形態でよいのかなと思いました。

公立との競合が生まれた場合には、中学から私立に通う意義や価値をアピールしていただきたいと思います。特に、「高校からの入学では得られないこのようなメリットがあります」と訴えることがカギになるでしょう。

学校の機能の性能評価と品質保証

昨年9月に、非公式教育サービスを提供する組織の品質向上を目的とした国際規格ISO29990が発効しました。ISOは国際標準化機構が各分野での規格統一を行うものです。塾の場合でいえば、「本塾に入り、このカリキュラムを受ければ、これだけの力がつきます」ということを事前に明示し、そのとおりの結果を出して修了させるということになります。

これは学習塾や英会話スクールなどの民間教育の話であり、学校には直接適用されません。しかし、こうした概念が社会に広がることで、近い将来、中等教育においても保護者の側から品質保証を求める声が上がってくる気がします。

そういう意味で私学には、もっと各校が目立ってほしいと思います。たとえば、予選落ちでもいいから全国コンクールや全国大会に挑戦しようと取り組む姿勢が、地域や受験生予備軍に浸透していきます。もちろん、大学進学という出口の問題は必須で、それを踏まえた上で、というのは、言うまでもありません。

●関西の伸びている私学が行っていること（川東氏）

教職員の一枚岩「感」を大切にす

2008年5月、大阪府茨木市にある「摂陵」という学校が早稲田大学の系属校となることが決まりました。摂陵はもともと10段階評価で6ぐらいの成績の生徒を、苦勞して京都大学5名、大阪大学10名、神戸大学20名などと合格させてきた学校でした。しかし、系属校となった初年度の入試結果はご承知のとおりです。中学の入学者は20名、高校も前年までは180~200名が入学していたのが、わずか17名です。

全国から生徒が集まってくるということで、地元への募集活動をほとんど行わなかったこともあります。最大の要因は、教職員の心が離れてしまったことだと思います。

早稲田摂陵は終わったのではないかといわれ始めたとき、ある人物が公立学校から校長として着任し、「もう一度一枚岩になろう」と教職員に呼びかけました。その結果、今年は中学が96名、高校は180名が入学する予定です。関西で伸びている私学に共通することは、校長をはじめとする管理職、教職員に一枚岩感があることです。なぜ、「感」がつくのか。管理職への不満はあってもいいのです。口に出さなければ、外からは一枚岩に見えるのです。この一枚岩感があれば、私学はまとまっていけると考えます。

ダイナミックな進学実績の伸張

続いて、大学進学実績を軸に元気になってきた2校を紹介します。1つ目は、兵庫のS学園です。同校は2001年の国公立大学合格者が2名と、定員充足もままならない学校でした。ところが、関東からある人物がやってきて学校改革を始めました。入学者レベルも上げる、教育の中身の充実も図る、毎年のように大学進学の実績が上がってくるということで、2010年の国公立大学の合格者は170名でした。この年は中高一貫の1期生が出た年で、1期生は東京大学1名、京都大学5名、大阪大学8名、他旧帝大7名、その他国公立大学37名という数字を残しました。

2校目は大阪のM学院です。同校の国公立大学の現役合格者は、2008年が22名、2009年が48名、2010年が93名です。関西では「現役で国公立大学に進学させることができない学校は教育力がない」とみられます。浪人するという事は、保護者から3年間何を教えていたかが疑われるため、国公立大学の現役合格力を競う世界に入っています。

同校の国公立大学の現役合格率は84%ですが、背景には、学内予備校の存在があります。学内予備校の成功ポイントの1つは、ワンウェイ・シラバスです。授業でやったことを深掘りするものでなければ、成果は上がりません。昼間に現在完了をするならば、夜は現在完了の入試バージョンです。灘クラスならともかく、普通のレベルの生徒は昼と夜で2つのカリキュラムがあると消化不良を起こします。同校では、500名ぐらい入る教室で350人ぐらいの生徒が月曜日から金曜日まで毎日放課後3時間勉強しています。4時30分ぐらいからはOBを中心とした学生チューターが来て、自習教室になります。大阪では家庭での学びの環境をなくした生徒が非常に多い。帰宅しても学習効果が上がらない。であれば、学校で自習をさせようということです。

同校の2011年の募集は400名ですが、439名が専願受験(首都圏でいう単願)です。このほかに併願で1754名おり、相当な入学者数になると思います。このように、大学進学実績は関西でも募集の大きな武器になっています。

●私学の良さはどこにあるか (安田)

もっと“私学らしい匂い”を

公立高校は東京を皮切りに、神奈川も千葉も埼玉も、ここ10年あまり「進学重点校」の整備に大変力を入れていきます。現在では非常に多数の学校が大学進学に特化した教育を行う学校に指定されています。各校の実際の取り組みの場面でも、埼玉の中堅進学校が連携して国公立大学受験者を増やすための取り組みを共同で行ったり、都立調布南が、他の部とも兼部ができる「勉強部」という部活を始めていて、びっくりしました。こうした公立の状況に対して、私学の良さとは何かを考えてみます。

以前の公立高校は学校ごとの校風が鮮明でしたが、最近は進学指導に重点が置かれ、その実績に教育委員会からノルマが課せられるなど、学校の特色や自由さが失われ「画一化」してきています。

一方で私学は、それぞれが多様で、自分たちで自由に教育方針を決められます。そこが私学全体の生きる道だと思います。また、公立では教員の異動がありますが、私学は教職員に運命共同体的な一体性があります。先ほどの川東さんの話にもありましたが、私学は一体感を見せることが重要ですし、それが強みでもあります。

公立が「大学進学までの教育」なら、私学は「情報処理力」「意思決定能力」「プレゼン能力」など、社会での活躍までを見据えた教育を行っていることをアピールしていただきたい。

実際、最近の入試で父親が選んでいる学校を見ていると、さまざまなリテラシーを伸ばしてほしいと考えている人が少なくないことがわかります。

“私学らしい匂い”を出すことも重要です。全員がバイオリンなど楽器に親しむ、男の子でも茶道必須、古くから伝わる伝統行事など、公立にはない「高級感」を演出することがあってもいいでしょう。学校教育の目標の1つに「人生を豊かにするための土台を作る」ということがあると思いますが、それに通じることです。公立ではできないような取り組み・行事があり、こうした経験がお子さんの人生を豊かにすると、保護者を納得させることができれば、私学の良さはもっと伝わっていくと思うのです。

第2の「建学の精神」を

現在、どの私学にも建学の精神があり、それを現代風に読み替えている学校も少なくありません。これをもう一歩進めて、「第2の建学の精神」をご自分たちで作ってはどうでしょうか。その目的は、①ご自分の学校の良さを再認識すること、②教職員の思いを共通させて一体感のある学校をつくること——です。ある学校では、「民主主義を守る意思」「フェアプレイの精神」を掲げています。

いま世界は劇的に動いています。これから社会で求められるのは、「乱世型」の人間です。「これからは『軟弱』では生き延びられない」と保護者を説得し、宿泊行事では、まずくても食べる、嫌いなものでも食べる……という経験をさせるのです。自然を利用して何でも作る、頑強な体力をつけるというアプローチです。なんだかんだいっても、「身体力」がいちばん生徒の幸せにつながります。

また、我々が育った時代は世界の中での日本のポジションも上がり、自分自身の生活も普通にしていれば当然よくなるという感覚でいられました。しかし、いま子どもたちは、日本という国はいったいどうなるのだろう、自分の30代・40代の生活が想像できないという不安の中に置かれています。そうした子どもたちに、自己肯定感や未来への希望を持たせてあげることが必要です。生徒を励ますと同時に、社会の荒波を乗り切っていける「悪戦苦闘」の機会を、中学・高校時代にぜひ作っていただきたいと思います。

最後に、私が今年保護者に話そうと思っていることを述べます。

「生徒はテキスト・黒板・テスト・パソコンだけから学ぶわけではありません。先生や先輩の言動を聞いたり、振る舞いを見たり、肌で感じたりして、それこそ体全体で成長していくのです。だからこそ、予備校ではなく学校に通うんです」

授業以外の部分でもぜひ生徒とたくさん触れ合ってください。

2011年度入試、キリスト教系が復活？

以前は、中学受験というと、女の子はミッションスクールに進ませたいという家庭が非常に多かった。ところが、女の子においても、大卒の就職難から(女子の方がより厳しい)、少しでも就職率がいい難関大学志向が強まり、中学校の選択も進学校を選ぶようになってきている。就職率ということになると、文系より理系の方が固いわけで、そうなるとうり系の大学・学部**に強い学校選択**ということになる。

ミッションスクールは、英語に強いイメージがあるだけに、逆に理数系には弱そうな印象があることがこのところ避けられてきた背景かもしれない。ところが2011年度入試では、盛り返しているキリスト教系の学校が多数あるのだ。

下の表は受験者数を過去3年間にわたって調べたものだ(一般入試と同日の帰国子女入試を含む)。太字が前年より増えた学校である。

●カトリック系

東 京						
学 校 名	2011年度		2010年度		2009年度	
	回数	受験者数	回数	受験者数	回数	受験者数
晃華学園	3	476	3	417	3	429
雙葉	1	465	1	374	1	595
東京純心女子	4	435	4	547	4	545
白百合学園	1	273	1	242	2	158
光塩女子学院	2	233	2	180	2	166
星美学園	4	110	4	126	4	202
聖心女子学院	1	83	1	89	1	146
目黒星美学園	3	64	2	56	2	104
聖ドミニコ学園	2	31	2	57	2	58
神 奈 川						
学 校 名	2011年度		2010年度		2009年度	
	回数	受験者数	回数	受験者数	回数	受験者数
聖セシリア女子	3	516	3	602	3	475
聖園女学院	4	345	3	333	3	561
カリタス女子	2	341	2	258	3	720
清泉女学院	2	313	2	408	2	422
横浜雙葉	1	254	1	278	1	250
湘南白百合学園	1	202	1	211	1	231
聖ヨゼフ学園	3	65	3	106	3	147
函嶺白百合学園	3	21	3	35	3	45
埼 玉						
学 校 名	2011年度		2010年度		2009年度	
	回数	受験者数	回数	受験者数	回数	受験者数
浦和明の星女子	2	2227	2	2061	2	2270

●プロテスタント系

東 京						
学 校 名	2011年度		2010年度		2009年度	
	回数	受験者数	回数	受験者数	回数	受験者数
鷗友学園女子	3	958	3	883	3	901
頌栄女子学院	2	760	2	716	2	769

女子学院	1	723	1	781	1	1135
普連土学園	3	655	3	696	3	863
恵泉女学園	3	651	3	649	3	878
香蘭女学校	1	428	1	453	1	647
立教女学院	1	389	1	386	1	461
東洋英和女学院	2	379	2	359	2	605
玉川聖学院	2	348	2	341	2	485
女子聖学院	4	257	4	350	4	693
自由学園女子	3	47	3	42	3	44
神奈川						
学校名	2011年度		2010年度		2009年度	
	回数	受験者数	回数	受験者数	回数	受験者数
横浜女学院	4	727	4	1118	4	911
横浜共立学園	2	634	2	617	2	731
横浜英和女学院	3	455	3	622	3	655
フェリス女学院	1	418	1	477	1	495
捜真女学校	2	310	2	420	2	336
聖和学院	4	138	4	161	5	135
緑ヶ丘女子	5	46	5	19	5	24

●カトリック系

18校中8校が増加校。これは、2011年度入試の全体状況からすれば非常に良好な部類と言える。気がつくのは、東京純心女子を除く入試規模が大きな学校が増えていて、小規模な学校が苦戦していること（目黒星美学園は入試回数を増やしている）。このことは2011年度入試の全体状況とまったく同様である。2010年度は18校中5校しかなかったから、この点でも良好と言える。白百合学園、光塩女子学院は2年連続の上昇。

●プロテスタント系

奇しくも18校中8校が増加校。増加と言っても、恵泉女学園、立教女学院、玉川聖学院は一桁だが、それでも全体状況からすれば非常に健闘したと言えるだろう。やはり鷗友学園女子、頌栄女子学院など入試規模の大きい学校ほど増え方も大きい。プロテスタント系は2009年度は「サンデーショック」で入試日を移動させている学校が多いので、2010年度入試での増加校は横浜女学院、捜真女学校、聖和学院の神奈川の3校しかない。したがって2年連続はゼロ。

●東京と神奈川で異なる状況

カトリック系、プロテスタント系の違い以上に大きいのが、東京と神奈川での状況の違い。東京はカトリック系9校中5校、プロテスタント系11校中6校が増加。20校中11校と増加している学校の方が多いのだ。

一方神奈川は、増加しているのはカトリック系8校中2校、プロテスタント系7校中2校だけ。増加しているうちの1校の聖園女学院も入試回数の増による面が大きいから、神奈川のキリスト教系は大苦戦と言える。

魅力のある学校がそろっているのに、それが保護者に伝わっていないことが残念である。首都圏で、広報面で大学合格実績を強調しない学校群の代表が神奈川のキリスト教系の女子校だが、それが昨今の保護者のニーズに合わなくなっているのかもしれない。またそれが東京への流失にもつながっているのかもしれない。

安全志向一段と高まる

景気後退だけではない都立の高倍率

都立入試は今年も激戦だった。全日制一次募集の実質倍率は1.40倍。昨年1.41倍と、42年振りに超えた1.4倍のラインに高止まりしている。チャレンジスクールなど、定時制単位制等を含む不合格者数は1万3千人を超え、中3生の約6人に1人が涙をのむ厳しい入試だった。

◆定時制単位制不合格 過去4年間で最多

今春の都内公立中卒業予定者数は、昨年より約3,400名(約4.5%)減って73,560名。これに対応して都立の募集人員も昨年より1,890人(約4.5%)少ない。

学級数の増減では、新設王子総合と移転の大田桜台が、計8学級増。減少は、立川国際中等教育学校に改編された北多摩が4学級の募集を停止。ほかに、武蔵など49校で51学級を減少させ、トータル47学級減と公私のバランスを取っている。

学級減が普通科旧学区に集中しているため、数値の動いた部分がある。大局的には前年と変わっていないが、受験生の安全志向は一段と高まっている。

都立志望者が増えたのは2年前、リーマンショック後の入試から。志望校調査では、08年→09年に、卒業予定者に占める都立全日制志望者の割合が、67%台から70%台に跳ね上がっている(私立、国立、他県志望は23%台から21%台にダウン)。その後3年間の数字はほとんど動いていないが、都立定時制(夜間)や通信制、特別支援学校の志望割合が、わずかに上昇していた。

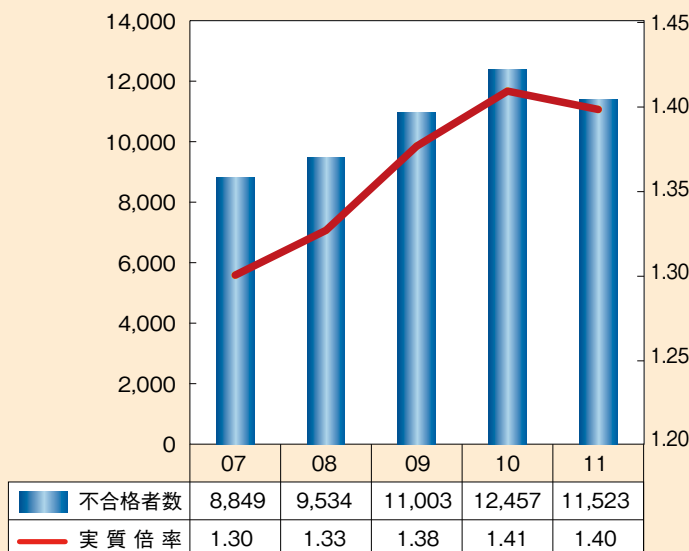
全日制一般入試の不合格者は合計で11,523名。昨年より900名強(約7.5%)減っている。

一方、チャレンジスクールなど定時制単位制の不合格者は、過去4年間で最多の1,423名。産業技術高専を加えた不合格者の合計は13,128名と、卒業予定者の約18%に上った。

全日制の実質倍率は1.40倍。下がったが、なお高倍率だ。定時制単位制等と高専を含む実質倍率は1.43倍。

安全を見越して、初めから定時制(夜間)を選ぶものが増えている。

不合格者数と実質倍率の推移



推薦応募倍率	09年度	10年度	11年度
普通科(男子)	3.09	3.08	3.08
普通科(女子)	4.04	3.98	3.91
普通科単位制	2.27	2.53	2.40
商業科	2.60	3.30	3.00
工業科	2.00	2.16	2.12
農業科	3.33	3.72	3.10
総合学科	2.04	2.24	2.09

◆小論文、作文導入の影響？

推薦入試では、新宿、墨田川、板橋など、枠を縮小した学校が19校と多かったが、石神井など拡大した学校もあり、推薦募集数の卒業予定者に占める割合は14.4%で、前年と変わっていない。

進学重点校、特別推進校、併設型中高一貫校では、今年から小論文または作文が実施された。

10年→11年で、実施した17校合計の応募者数を比べると、3,587名→2,999名と、前年の84%に減っ

ている。

安全志向で、上位校の受検者は減っているが、17校合計の一般入試の受検者は、前年の92%に止まっており、導入の影響が出ているといえそうだ。

武蔵の募集減で一般の受検者が前年より50名増えた国分寺では、推薦では44名減とし、推薦倍率は1.86倍に低下している。新規に導入した新宿や男子の日比谷、小山台などでも減少が目立った。

文化・スポーツ等特別推薦は、昨年の85校、938名から、今年は90校、983名に拡大したが、応募者は昨年の1968名から1911名に減少。3年連続して上昇していた実質倍率も、2.46倍から2.34倍に低下している。

一般入試では、全日制全体の受検倍率は、現在の制度になって最高だった昨年の1.44倍とほぼ同じ1.43倍と、極めて高かった。

普通科(旧学区)男女以外が軒並みダウンしているのは、募集減が普通科旧学区校に集中したため。旧学区では男女枠緩和のおかげで、男子の実質倍率が、昨年、女子を上回ったが、今年は男女ともに1.44倍で並び、近年の最高値に。不受検率6.19%、辞退率0.9%も、過去最低を更新している。

年度	一般入試							
	募集人員	応募者数	応募倍率	受検者数	受検倍率	不受検率	実質倍率	不合格者数
07	28,857	41,368	1.43	38,401	1.33	7.20%	1.30	8,849
08	28,432	41,366	1.45	38,515	1.35	6.90%	1.33	9,534
09	28,585	42,847	1.50	40,184	1.41	6.22%	1.38	11,003
10	29,743	45,612	1.53	42,783	1.44	6.20%	1.41	12,457
11	28,340	43,059	1.52	40,395	1.43	6.19%	1.40	11,523
学科別受検倍率	普通科男	普通科女	普通科単位制	商業科	工業科	農業科	総合学科	辞退率
07	1.31	1.44	1.42	1.12	1.17	1.31	1.26	1.2%
08	1.37	1.46	1.46	1.09	1.14	1.25	1.25	1.0%
09	1.38	1.53	1.54	1.16	1.26	1.36	1.31	1.0%
10	1.41	1.54	1.57	1.26	1.36	1.55	1.37	1.0%
11	1.43	1.56	1.54	1.15	1.26	1.39	1.27	0.9%

◆男女ともくつきり二極化

不合格者の減少はどのレベルで起きたのか。下のグラフでは、不合格者数と実質倍率の前年からの推移を、学校レベルごとに、男女別のグラフで示した。

手順は次の通り。①都立各校を「進研Vもぎ」の合格基準でA～Eの5つのレベル（A・・・800点以上、B・・・700～800点、C・・・600～700点、D・・・500～600点、E・・・500点未満）に分け、②レベルごとの不合格者数の合計を棒グラフで、平均実質倍率を曲線のグラフで描いた。データは、都立全日制全校と定時制単位制等、および産業技術高専について、都の発表した受検者数と合格者数から算出した（夜間定時制と帰国子女入試を除く）。

男子の不合格者数を示す棒グラフは、昨年のEレベルが飛び抜けて高く、定時制の2次募集に超過の恐れがあったことがよく分かる。

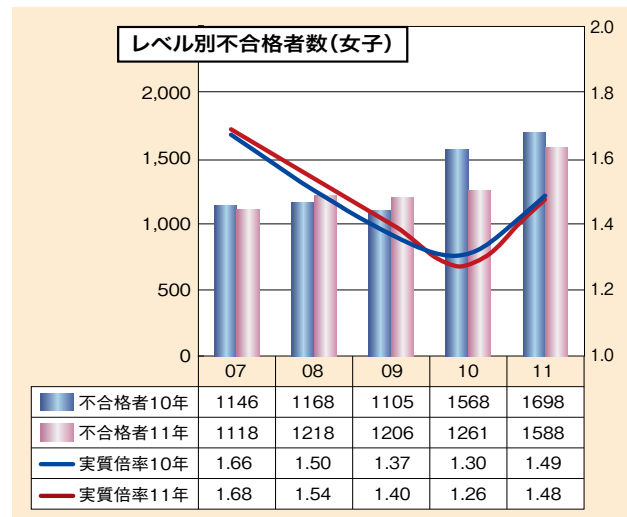
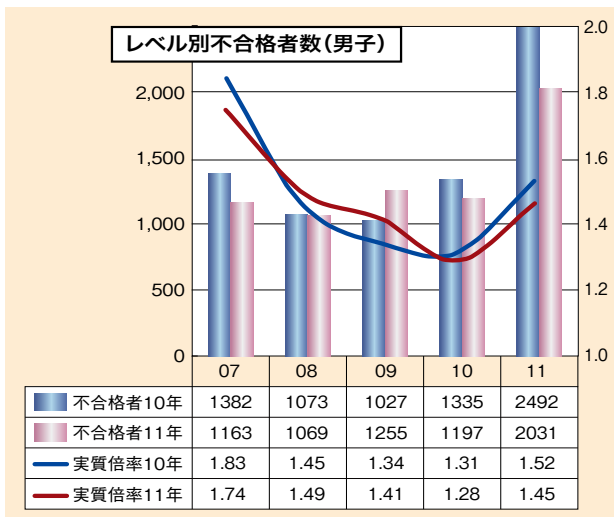
今年は、その部分が400名以上減っている。その5%、120名強は卒業予定者の減少を反映しているとみられるが、安全を考え、志望校調査後に私立に向かった者もいるのではないか。また、夜間定時制の受検者が男子だけで70名程増えており、一次から夜間定時制に願したケースもあるだろう。

次に減少幅が大きいのはAレベル。進学重点校や特別推進校が位置するレベルで、受検者数が300名以上減少している。これについては次ページで詳しく述べたい。

逆にCレベルでは不合格者が増加している。このレベルでは、募集減が16学級と、他のレベルより多かったことが原因とみられる。

一方、女子の不合格者数も下位レベルの減少が目立つが、E以外のレベルでは、今年の棒は同じ高さで並んでいる。男子で大きく減ったAレベルでも、女子の減少はわずか。増えたのは、男子と同じCレベル。それでも100名程度と変化は少ない。

実質倍率の曲線は、男女ともに二極化のカーブを描いている。上位レベルには、大学進学実績を伸ばす指定校が、下位には、チャレンジスクールやエンカレッジスクール、昼夜間定時制などセーフティネットの役目を務める学校が多くある。カーブの概形は昨年とあまり変わっていない。世の中を映す鏡のようだ。



◆最上位校で大幅に減少

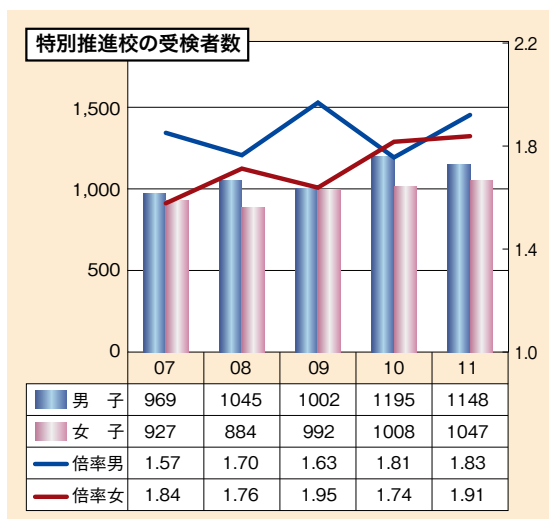
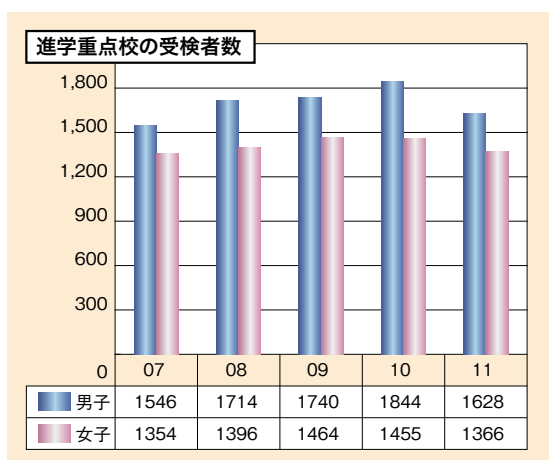
09年→10年→11年の進学重点校の受検者数は、男女計で3,204名→3,299名→2,994名。10年前の指定から、右肩上がりが続いていた進学重点校の受検者数は、今年、初めて前年比減少となった。

男女別にみると、男子が1,740名→1,844名→1,628名と、前年より216名(88%)に減り、女子は1,464名→1,455名→1,366名と、前年より89名(94%)に減っているが、女子の減少は、昨年から始まっていたことが分かる。

受検者数を前年より大きく減らしたのは、西…143名(男子86名、女子57名)減、国立…78名(男子46名、女子32名)減、戸山…73名(男子44名、女子29名)減、八王子東…47名(男子41名、女子6名)減の4校。

いずれも大学進学実績の高い、したがって合格基準も最上位の学校。また、倍率の上昇が続いていた学校でもある。過去3年間の受検倍率は、西の男子が、1.80倍→2.06倍→2.22倍、戸山の男子が2.08倍→2.16倍→2.50倍と、都立の一般入試では異常な高さに上っていた。

7校平均の受検倍率も、昨年の男子は1.98倍と「2人に1人が落ちる」状況に。今年は、こうした過去の数値が、受験生の不安心理を掻き立て、一気に安全志向へと走らせたようだ。昨年、東大合格者が急増した日比谷でさえ、男子の受検者が、昨年→今年で315名→307名と減っている。



一方、特別推進校の受検者合計は、昨年の2,203名から、今年は2,195名(男子47名減、女子39名増)と、ほとんど変わっていない。卒業予定者の5%減を考えると、やや増加傾向とみることもできる。

ただし、小山台、駒場、町田の学級減や、推薦枠を絞った新宿の一般募集増、武蔵の学級減の影響を受けた国分寺の存在など、不確定な要素が多く、ひと括りにはできない。

過去3年間、2.09倍→2.34倍→2.59倍と受検倍率の高騰が続いていた新宿が、受検者数を前年より31名減らしている。町田の男子も50名の減少。小山台の男子も17名減った。

増えたのは、国分寺…50名(男子31名、女子19名)、駒場…21名(男子18名、女子3名)の2校。これだけでは、進学重点校などからの移動があったかどうか、正確には分からない。

「自校作成校問題の準備にはお金も時間もかかる。最近の受験生には、近場の塾で安上がりにできる受験が人気だ」。複数の中学校長から聞いた話だが、確かに自校作成校の受検者数は、昨年より減っている。

普通科旧学区男子					
レベル	学 校 名	受検倍率	不合格者数	前年増減	合格基準
A	日 比 谷	2.31	156	▲ 6	870
	戸 山	2.17	147	▲ 39	840
	駒 場	1.94	108	△ 35	800
	青 山	1.75	98	△ 24	820
	小 山 台	1.82	93	△ 0	800
	立 川	1.65	81	▲ 13	840
	西	1.57	62	▲ 83	870
	国 立	1.52	61	▲ 46	870
B	三 田	2.09	128	△ 35	760
	武 蔵 野 北	1.75	79	△ 22	770
	豊 多 摩	1.62	72	△ 18	700
	小 金 井 北	1.66	66	△ 28	750
	城 東	1.54	65	▲ 31	740
	日 野 台	1.63	63	△ 24	740
	小 松 川	1.50	62	△ 0	770
	文 京	1.40	62	▲ 24	700
	南 平	1.48	56	△ 17	710
	上 野	1.44	56	△ 0	700
	調 布 北	1.50	55	▲ 4	730
	町 田	1.50	54	▲ 32	770
	竹 早	1.57	53	△ 32	790
C	武 蔵 丘	1.57	77	△ 15	600
	調 布 南	1.73	73	△ 4	660
	狛 江	1.48	64	▲ 4	690
	杉 並	1.46	64	△ 13	640
	東	1.59	60	△ 11	610
	清 瀬	1.50	56	△ 27	690
	豊 島	1.44	54	▲ 23	660
	小 平	1.55	54	△ 22	650
D	東 大 和	1.45	52	△ 32	600
	鷺 宮	1.50	64	△ 17	550
	桜 町	1.46	56	△ 38	520
	本 所	1.57	53	△ 6	570
E	秋 留 台	3.13	81	△ 12	—
	永 山	1.70	65	▲ 24	480
	東 村 山 西	1.50	59	△ 16	490
	拝 島	1.53	53	▲ 7	470
	大 山	1.41	51	△ 15	440
	葛 西 南	1.41	50	▲ 7	440

普通科旧学区女子					
レベル	学 校 名	受検倍率	不合格者数	前年増減	合格基準
A	青 山	1.92	104	▲ 7	830
	竹 早	2.26	94	△ 25	800
	小 山 台	1.95	93	△ 36	800
	駒 場	1.93	92	△ 16	810
	日 比 谷	1.83	87	△ 9	870
	立 川	1.70	80	△ 33	840
	戸 山	1.67	73	▲ 34	850
	八 王 子 東	1.50	52	▲ 8	840
B	三 田	2.36	118	▲ 20	770
	武 蔵 野 北	2.19	98	△ 32	770

◆不合格者の多い学校

一般入試の不合格者数が100名(男女計)以上の学校は、4年前には、全日制23校、定時制7校の合計30校だった。その後、増え続け、昨年は41校+7校の合計48校に。今年は、38校+8校の合計46校と、やや少なくなった。

左の表には、不合格者数の多い学校をまとめた。普通科旧学区校(男女別)と単位制専門学科等は50人以上の学校を、定時制単位制では60人以上の学校を、レベルごとに多い順で並べた。

普通科男子Aレベルには、進学重点校6校と特別推進校2校が入っているが、前年より増加(△)したのは駒場、青山の2校だけ。戸山→青山、駒場など、受験生の移動があったようにみえる。

もっと大きく、前年増減の列をみると、Aレベル校では▲(前年より減少)が多く、Bレベルでは△が多い。A→Bの移動も…。

09年→10年→11年の三田の受検者数は、男女計で467名→473名→457名と、ほとんど変わっていない。豊多摩、小金井北、日野台、南平、竹早など、このレベルには、同様の学校が多くあるほか、進学推進校も多く、大学進学指導の充実など、宣伝面で指定の効果が出ている学校もある。

ところで、進学推進校14校合計の推移を調べたところ、09年→10年→11年の受検者数(男女計)は、4,370名→4,702名→4,735名と、昨年から増加の傾向にあることが分かった。

不合格者数も、昨年より200名以上増加している。とくに合格基準の高い国際、竹早、武蔵野北、三田などでは、受検倍率の上昇が起きており、進学重点校→特別推進校→推進校と、志望者層が徐々に動いてい

B	文京	2.05	98	▲12	720
	上野	1.72	81	▲22	720
	小金井北	1.95	77	△4	760
	町田	1.72	74	△13	780
	狛江	1.64	68	▲17	700
	豊多摩	1.71	67	▲1	720
	城東	1.62	65	△16	740
	北園	1.57	56	▲26	750
	井草	1.55	55	△13	720
C	日野台	1.55	54	△21	750
	調布北	1.73	54	△5	740
	武蔵丘	1.94	81	△4	610
	豊島	2.08	80	△9	670
	杉並	1.92	80	△0	650
	調布南	1.93	79	▲1	660
	東	1.90	75	△34	610
	小平	2.16	74	△18	670
	石神井	1.78	69	△22	650
D	府中	1.63	52	▲26	610
	鷺宮	2.04	88	△19	560
	本所	1.89	70	▲7	590
	東村山西	1.71	53	△18	500
	小岩	1.66	51	△21	560
E	日野	1.51	50	▲1	590
	拝島	1.78	69	△7	490
	永山	1.91	63	▲15	480
	淵江	1.89	59	△15	460
	多摩	2.05	54	△20	450
	野津田	2.28	53	△8	450
E	深沢	1.87	51	△21	460
	秋留台	2.47	50	△1	—

単位制専門等					
レベル	学校名	受検倍率	不合格者数	前年増減	合格基準
A	新宿	2.14	280	▲60	810
	国分寺	2.07	225	△50	810
	国際	2.21	125	△5	820
B	工芸	1.47	51	▲17	700
C	産業技術高専	1.86	182	△40	660
	墨田川	1.36	83	△35	690
	芦花	1.47	50	▲43	600
D	杉並総合	1.53	59	△1	550
E	大江戸	2.87	215	▲4	—
	八王子拓真	2.54	148	▲20	470
	稔ヶ丘	1.91	147	△51	—
	六本木	2.16	133	▲71	—
	世田谷泉	1.86	119	▲35	—
	荻窪	2.16	111	▲7	440
	一橋	2.07	103	△15	430
	桐ヶ丘	1.90	103	▲12	—
	砂川	1.77	92	△90	480
	浅草	1.80	76	▲29	430
	練馬工業	2.32	70	▲8	—
	新宿山吹	1.52	69	△36	490

ることを想像させる。

Cレベルには、それぞれ特色ある学校が並んでいる。

この3年で、52名→139名→158名と不合格者(男女計)が急増している武蔵丘では、校内研究誌のタイトルを「恋文、そして挑戦状」と名付け、生徒が真剣に学習に取り組むよう激励している。

調布南は部活動に「勉強部」の設置を計画、大規模改修した新校舎の人気も高い。狛江、杉並、東、清瀬では、土曜講習、勉強合宿、学力の定点観測など、学力向上のためのさまざまな仕掛けを設けている。

鷺宮…152名、本所…123名と、Dレベルにも不合格者が100名(男女計)を超える学校が生まれている。両校とも、生活指導に定評のある学校に生まれ変わっている。

Eレベルでは、推薦枠を広げた秋留台や学級減した永山などが、男女計100名超の不合格者を出している。

単位制専門等では、国際、産業技術高専、コース英語科など、実学系が人気だった。高校卒業後の進路を見越した学校選択が広がっている様子だ。

前年より不合格者数が増えた学校と増加数を順に並べると、男子は、①桜町38名、②三田35名、③駒場35名、④竹早32名、④東大和32名など、女子は、①小山台36名、②東34名、③立川33名、④武蔵野北32名、⑤富士森30名など。

単位制、専門学科、定時制単位制では、①砂川90名、②稔ヶ丘51名、③国分寺50名、④産業技術高専40名、⑤墨田川35名などとなっている。

こうした学校では、校長以下スタッフの力で学校の魅力を高め、志望者を増やしている。都立の高倍率は、景気後退のためだけではないようだ。

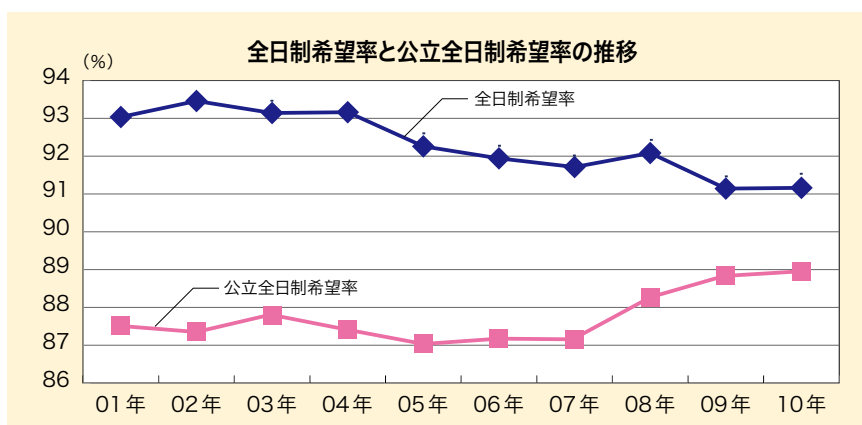
変化が少ないが、公立志向は若干上昇

1. 変化が少ない公立入試

「ビジョナリー」昨年11月号でご紹介した通り、今年の神奈川県公立高校入試は、高校再編による新設校や募集停止校もなく、入試制度にも大きな変更はない。内申と学力検査の比率など、各校が独自に定める内容の一部に変更が出ただけだ。横浜緑ヶ丘、希望ヶ丘、川和、追浜、相模原、秦野、厚木、大和の8校が、湘南や横浜翠嵐などの10校に引き続き、学力向上進学重点校に追加指定された。先行の10校が後期の学力検査で独自問題を実施しているのに対し、追加の8校は今年は独自問題ではなく、共通問題だった(横浜市立のサイエンスフロンティアも昨年から3科が独自問題)。

2. 中3生の人口と進路希望

2010年度の公立中の卒業予定者数は、昨年より約2,200名減の66,472名で、首都圏他都県と同様、今年は人口減の年だ。このため、川和、横浜緑ヶ丘、横須賀など、普通科や総合学科の募集規模が大きい学校を中心に、全日制では全県で募集定員が30学級削減された(定時制では削減はない)。昨年10月20日行われた進路希望調査によると、全日制高校の進学希望者数は昨年より約2,000名減の60,611名、希望率は昨年同様の91.2%、公立全日制的希望は昨年より約1,700名減の約53,900名で、



全日制的希望者に対する公立希望率は昨年よりやや上がった88.9%だった。

グラフは全日制高校の進学希望率と、全日制の中での公立希望率の推移だ。全日制的の進学希望率はかつての93%台の水準から徐々に低下、今年は昨年同様の91.2%で、最低水準を2年続けている。昼間部定時制高校や頻繁にスクーリングを行う新しいタイプの通信制高校が増えていて、そちらを希望する受験生が増えている。公立高校の進学希望率は徐々に下がっていく傾向にあったが、08年から上昇に転じ、今年は88.9%と、昨年よりやや上がっている。

3. 前期選抜の概況

普通科前期志願者数トップ10					普通科前期志願倍率トップ10						
		2011年度		2010年度				2011年度		2010年度	
1	市ヶ尾	443	新羽	463	1	横浜翠嵐	4.53	相模向陽館(午前)	5.12		
2	新羽	409	保土ヶ谷	440	2	愛川	3.69	横浜翠嵐	4.85		
3	綾瀬西	397	川崎北	420	3	相模向陽館(午前)	3.57	川和	3.54		
4	川崎北	375	逗葉	393	4	川和	3.48	白山	3.25		
5	菅	365	座間	392	5	希望ヶ丘	3.10	平塚湘風	3.24		
6	新栄	362	新栄	390	6	市立橘	2.96	多摩	3.18		
7	茅ヶ崎西浜	361	海老名	390	7	綾瀬西	2.90	逗葉	2.85		
8	荏田	353	白山	384	8	舞岡	2.81	座間	2.84		
9	岸根	351	川和	375	9	横浜平沼	2.781	保土ヶ谷	2.784		
10	永谷	334	霧が丘	364	10	逗葉	2.780	生田	2.782		

募集定員削減に伴って全日制では582名の定員削減となっている。志願者数も40,686名と昨年より2,234名の減少だった。表は普通科の志願者数、志願倍率のトップ10の昨年との比較だ。志願者数では市ヶ尾がトップ、新栄、荏田、新羽、岸根、川崎北、菅と、旧横浜北部学区とその隣接地域の学校がトップ10に入っている。昨年も白山、川和、霧が丘、新羽、新栄、川崎北が入っており、旧横浜北部学区とその隣接地域の高校の人気の高い。もともと、旧横浜北部学区やその隣接地域は県内有数の私立志向の高い地域で、昨年秋の進路希望調査でも旧横浜北部・東部、旧川崎北部・南部はいずれも全日制公立高校の進学希望率が全県平均を4~8%程度下回っている。前期選抜は推薦ではなく、公立第一志望でなくても出願できるため、私立第一志望生の出願もそれなりの人数だと思われるが、旧他学区からの受験生流入も大きい。地域的な好感度だろう。

倍率面では横浜翠嵐、川和、希望ヶ丘といった旧学区トップ校、横浜平沼、市立橘といった人気定番校の他、昨年トップだった昼間部定時制の相模向陽館・午前は、昨年より倍率が下がったとはいえ、今年も高倍率だ。また、愛川が2位になっていることが注目される。同校は昨年からの地域の中学校向けに連携選抜枠を作り、そのために一般前期の定員が減って高倍率になっている。

一般的な普通科以外ではクリエイティブスクールの志願者が大きく増加した。一昨年のスタート当初も多く志願者があり、昨年は反動から志願者減となったものの、それでも釜利谷と田奈が志願者数1・2位だったのが、今年は再び志願者が大きく増加している。志願倍率では、市立横浜総合・総合I部、市立橘・国際、弥栄・音楽、市立横浜商業・国際、磯子工業・建設がトップ5だった。昼間定時制の市立横浜総合は午前のI部と午後のII部が年によって交互に上位に来るのが特徴だ。市立横浜商業・国際学は例年倍率上位で定番校になっている。

4. 後期選抜の概況

全日制は募集定員21,431名に対して志願者31,241名で、昨年に比べて募集定員は約700名減っているが、志願者は約1,300名減少し、トータルでは倍率が緩和している。学科別では一般的な普通科の志願者数が4.9%減と一番大きく、クリエ

イティブスクールは前期に続いて増加、普通科専門コースも増加した。

普通科後期志願者数トップ10					普通科後期志願倍率トップ10						
		2011年度		2010年度				2011年度		2010年度	
1	横浜翠嵐	520	横浜翠嵐	637	1	横浜翠嵐	2.35	横浜翠嵐	2.87		
2	湘南	493	湘南	452	2	相模向陽館(午前)	2.17	白山	2.40		
3	川和	372	川和	432	3	永谷	2.14	相模向陽館(午前)	2.08		
4	市ヶ尾	353	柏陽	345	4	綾瀬西	2.02	光陵	2.03		
5	多摩	348	新羽	341	5	新栄	1.88	永谷	2.00		
6	横須賀	319	光陵	337	6	愛川	1.87	大井	1.99		
7	柏陽	318	横浜緑ヶ丘	336	7	逗葉	1.864	新羽	1.92		
8	横浜平沼	312	多摩	333	8	市立橋	1.859	平塚湘風	1.89		
9	平塚江南	308	平塚江南	322	9	平塚湘風	1.85	深沢	1.84		
10	横浜緑ヶ丘	301	市ヶ尾	309	10	多摩	1.79	逗葉	1.83		

表は普通科後期の志願者数・志願倍率トップ10で、志願者数が大きく減ったものの今年も横浜翠嵐がトップ、湘南、川和と、トップ3は昨年と同様だ。市ヶ尾、多摩、平塚江南、横浜緑ヶ丘は昨年もトップ10に入っており、柏陽や横須賀、横浜平沼も昨年はトップ10に入らなかったものの、上位に位置していた。前期の志願者数は、トップレベル校の募集定員が少ないこともあって、人数的には中堅前後の各校に志願者が集まるが、後期の志願者数はトップ校・2番手校が中心だ。倍率では横浜翠嵐が昨年同様倍率でもトップだ。倍率になると、トップ校や2番手校ばかりでなく、比較的入り易い学校も目立つが、相模向陽館・午前は別として、入り易い学校は人気は隔年的に変動することが多く、昨年・今年とトップ10に入っているのは永谷、逗葉、平塚湘風の3校だけだ。ただ、このところ人気が高い2番手校の市ヶ尾や市立橋がトップ10に入っていることから、トップ校と入り易い学校に志願者が二極化する傾向はやや弱まってきた。

その他ではやはり定員の多い学校・学科が多く志願者を集めるが、倍率ではクリエイティブスクールの釜利谷が今年もトップ、田奈、弥栄・音楽、市立橋・国際、市立横浜総合・I部がトップ5で、前期と同じ傾向になっている。大楠も上位に入った。

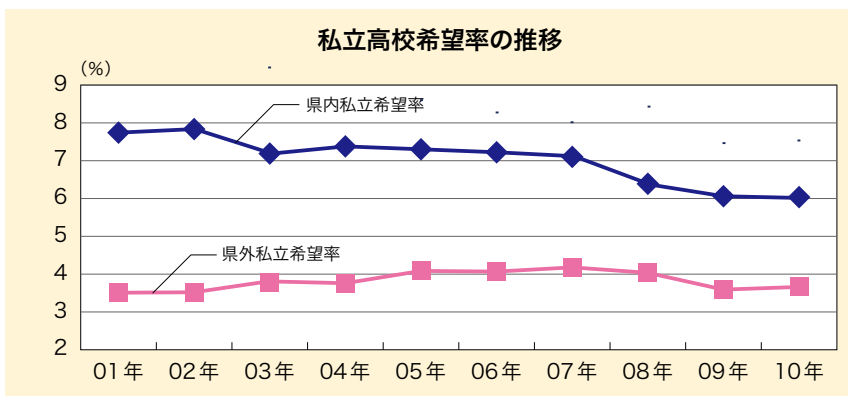
5. 目立つ学校について

市立東は、今年は人気なかったようで、後期が定員割れで二次募集となった。横浜市立高校は全般的に人気が高い学校が多く、珍しい。昨年新設したものの受験生に浸透せず、第二志望でやっと定員を満たした市立金沢の文理特進は、今年は一応「形になった入試」だったが、一般コースに対しての「特進」というにはまだまだ不十分な水準だろう。サイエンスフロンティアの成功で、新設コースのPR効果の検討が不足していたようだ。そのサイエンスフロンティアは開校3年目を迎え、前期の定員枠が拡大したこともあり、人気は落ち着いてきたようだ。ただ、学区外(横浜市外)の人気は高く、前後期とも志願者の3割は学区外になっている。この他、旭、永谷、市立橋・普通、厚木東、大原、相模大野などの志願者増が目立った。

文/池田 亨((株)エデュケーショナルネットワーク データ課長)

受験生の都内志向が弱まる

1. 受験生の志向と出願総数



公立高校の記事でご紹介したように、今年は公立中3生の人口が約2,200名減少し、進路希望調査では全日制公立高校の希望率がやや上昇していた。グラフはその進路希望調査での私立高校希望率の推移である。県内私立高校の進学希望率は6.0%、県外(主として東京)の希望率は3.6%と、それぞれ前年と変わっておらず、このままなら県内私立高校の出願者数は、人口減少分だけ減ることが予想されていた。ところが、実際の出願総数はほぼ昨年並みだった。人口減少分を出願増加がカバーした結果だった。

2. 私立高校は昨年並みの志願者数

区分	推薦入試					一般入試				
	11年	10年	09年	08年	07年	11年	10年	09年	08年	07年
男子校	1,258	1,293	1,221	1,128	1,195	3,746	4,182	4,005	4,213	4,386
女子校	806	882	847	956	1,212	1,388	1,544	1,510	1,410	1,820
共学別学校	3,648	3,744	3,678	7,123	7,687	25,561	25,048	23,331	21,950	21,788
合計	5,712	5,919	5,746	9,207	10,094	30,695	30,774	28,846	27,573	27,994
区分	オープン入試					合計				
年度	11年	10年	09年	08年	07年	11年	10年	09年	08年	07年
男子校	93	113	79	92	110	5,097	5,588	5,305	5,433	5,691
女子校	135	81	36	43	46	2,329	2,507	2,393	2,409	3,078
共学別学校	840	630	543	367	395	30,049	29,422	27,552	29,440	29,870
合計	1,068	824	658	502	551	37,475	37,517	35,250	37,282	38,639

注 法政第二・法政女子・鎌倉学園・藤嶺藤沢・横浜(特進)の書類選考型入試は、正式には一般入試の扱いたが、学力試験が行われなため、ここでは推薦に含んでいる。

表は小社アンケートによる志願者数の集計で、一部入試結果未公表の学校があること、二次募集は含んでいないケースもあるため、最終結果ではない。推薦入試・一般入試・オープン入試を合計した志願者数は昨年とほぼ同数の約37,500件だった。

人口が減っているのに昨年並みである。おそらく就学支援金の影響だろう。神奈川県でも公立高校授業料無償化と同時に、私立高校生にも国の支給分とは別に県独自の支援金を上乘せする制度がスタートしたが、これは県内私立高校通学者に適用され、隣接県の私立高校通学者には適用されない。このため、私立高校希望者が、県外(主に都内)私立高校ではなく県内私立高校を選んだため、私立高校の人気そのものは上がっていないにもかかわらず、県内私立高校の志願者が増えたのだろう。実際、小社アンケート集計では都内私立高校の志願者数が約8%減少している。県内の公立中3生は毎年5,000~6,000名が都内を中心とする県外私立高校に進学しているが、この動きに歯止めがかかったといえる。都県独自の就学支援金は、その支給金額や支給対象は都県で異なっていて、東京都民は隣接県の私立高校に進学しても支給されるが、神奈川県をはじめ、千葉・埼玉県では県外私立高校進学者には支給されない。こうしたことから、県内私立高校の中には後述のように入試改革で都内からの受験生が増えたと思われるケースもあり、その結果、人口減・私立志向は上がっていないにもかかわらず昨年並みの志願者数を確保できたと思われる。

さて、表の他の点にも注目してみたい。推薦入試は男子校・女子校・共学別学校とも志願者が減少しているが、一般入試は共学別学校が増加している。オープン入試は絶対数が少ないので別とすると、中3人口減少にもかかわらず志願者数を維持した原動力は共学別学校の一般入試だ。具体的に言えば日本大学(日吉)の志願者が200名余から1000名と、大幅に増加しており、この増加分が県内共学別学校一般入試の志願者数増の中心になっている。同校は都内生の受験も多く、また、都内生を狙った入試を新設しており、それが支持された結果だ。

3. 大きな改革で目立つ入試について

日大は志願者を大幅に増やしたが、改革の骨子は次の通り。

- ①特進コース新設、原則として日大推薦は前提としない。
- ②他県向けB推薦(1/22に受験できる他校併願可能な入試、実質は都内生対象)、都内生向け併願優遇(一般入試での他校併願生の優遇扱い、制度としては以前からあったが、同校は実施していなかった)の新設。
- ③県内生向けオープン入試の新設、一般入試とオープン入試を2回設定とする。

日大は首都圏の日大系列校の中でも比較的内部進学率が高く、特進コースといった進学校カラーとはあまり縁がなかったが、日大習志野や日大第二の他大学進学実績と人気の関係、日大鶴ヶ丘の特進設置、日大第三の他大学進学実績の向上、日大藤沢の中学開校と中学からの入学生に対する他大学進学対策などが次々に実施されていく中で、学校の人気を上げて入試を活性化し、成績上位の入学希望者を獲得し続けるためには、大胆な改革が必要と判断したのだろう。

入試の面では、併願の成績上位生をいかに集めるかを考えた設定だった。昨年東京都内でB推薦が中止され、1月中旬に併願校の合格を確保したい受験生は隣接県の高校を受験するしかなくなっている。もっぱら千葉と埼玉の高校に流れていて、もともと東京と歩調を合わせるケースが多かった神奈川にはあまり流れていなかったが、日大の入試新設で多くの受験生が流入した。県内では一昨年、桐蔭学園と鎌倉

学園が1月実施の併願可能な入試を諸事情で取りやめたため、都内生向けB推薦の効果は分かっているが、なかなか新設に踏み切れない学校がある中で、日大は思い切って実施して受験生が集まった。また、県内生向けにはオープン入試を新設したが、ちょうど今年から日大藤沢がオープン入試を取りやめた。同校は県内オープン入試で最大の受験者数だった。その影響もあったかもしれない。

同校は中学入試も、「午後入試新設」という、今までなら考えられなかった大改革を実施し、多くの受験生を集めた注目校だ。「中高両方」で入試が成功している。

その他の大きな変更では横浜国際女学院翠陵が共学化、校名を「横浜翠陵」に変更し、特進・国際・文理の3コース体制とした。もともと国際系に強い高校だったが、今後は共学校として難関大学進学対策も充実させていく。各入試の志願者合計は男子165名、女子184名だった。昨年は女子のみで2ケタに留まっていたことから、男子にも十分浸透したし、女子の共学志向の受験生も十分取り込むことが出来た結果だったと言えるだろう。なお、「ビジョナリー」11月号でも触れたが、同校の共学化と、神奈川学園・洗足学園(音楽科)の募集停止のため、女子校は3校減って12校となった。10年前は23校だったので半減したことになる。

今年の入試改革ではないが、入試改革が浸透して志願者が増えたのは横浜と藤嶺藤沢だ。どちらも昨年新設で、書類選考が志願者増加のけん引役だ。一昨年、鎌倉学園が1月併願推薦を取りやめたことに伴って、同校が代わりに新設したもので、一般入試だがオープン入試のように併願可能、しかもペーパーテストはなく、面接もなく、入試相談で出願基準OKなら合格、というものだ。昨年も話題になったが、今年は昨年以上に浸透している。

4. 志願者の増加が目立つ入試

上記各校以外に志願者の増加が目立つのは、何と言っても中大横浜山手だ。あまり多く増えている印象はないが、今までが少数の入試だったため、率で見ると相当増えている。急激な出願基準の引き上げで受験生離れを起こすのでは、と心配されたが、成績上位の志願者が確実に増えている。なお、同校は2013年度からセンター北に移転することも受験生が増える理由だろう。なお、2014年から共学化予定だ。

他に看護医療の募集を停止した鶴見大附属、高木学園女子、橘学苑、横浜創英、横浜学園、柏木学園、コース大改編で進学カラーを色濃くしたアレセイア湘南などの志願者が増えている。1校1校は他校との競合関係などでいろいろなケースがあるが、地道な広報活動や学校改革が評価されたケースが多い。

今年は都内志向が弱まったことによって、県内私立の志願者が減らずに済んだ(増えた、とは言えない)入試だった。毎年志願者の増減はあるが、なかには大きく減った学校もある。全部が全部とは言わないが、話題性のある学校、吸引力のある学校に流れたための減少としか思えないケースもある。生徒集めで汲々としてはいけないが、生徒が集まるのは魅力があるからだ。来年は今年のように「減らずに済んだ」では済まないかもしれないので、学校の中身、広報等、再度検討して4月をお迎えいただきたいと思う。

文・池田 亨(株)エデュケーショナルネットワーク・データ課長

今春大卒者の実質就職率は60%以下

●内定率は就職の実態を表していない

今春卒業の大学生(2011年3月卒業生)の就職状況については「就職氷河期に戻った」「それ以上の超氷河期」といった内容で、大手メディアは報道し続けている。実際にひどい状況なのだが、その実態がどのようなものなのか、またそれは、何を根拠として述べられたものなのかとなると意外に曖昧なのである。

学生の就職状況を表す指標として、よく取り上げられるのが「内定率」だ。この定義は就職希望者に対して、内定した者の割合を示したものである。例えば昨年度(2010年3月)卒業者の場合、就職希望者が約35.8万人で内定者は約32.9万人、内定率は約92%という結果が出ている。この数字だけ見ると、「9割以上の内定者が出たなら、それほどひどい数字ではないのでは?」と思うのがふつうではないだろうか。しかし、2010年3月の大学卒業生数は、約54.1万人だった。先にあげた内定者数32.9万人という数字を卒業生に対する割合で算出すると、約61%でしかない。つまり4割近い大学生が就職していないということになる。

内定率が就職希望者に対する内定者の割合であるのに対して、卒業生全体に対する内定者の割合を「就職率」と呼んでいる。大学生の就職実態を知るには、この「就職率」を見る必要があるのだ。

内定率は当該学年の10月に最初の途中経過が文科省から発表され、以後2ヶ月ごとの数字が公表されていく。最終内定率は学生が卒業後の5月ころに出され、同時にその年の就職率も発表される。

今春の卒業生については、今のところ12月段階の内定率データが発表され、

68.8%という数字が出ている。同一時点で比較してみると、09年3月卒業生の12月内定率が80.5%、10年3月卒業生の12月が73.1%だから、やはり激しく落ち込んでいる(図1)。これをさらに、最終内定率と就職率に対応させて示すと、09年3月卒は95.7%→68.4%(最終内定率→就職率)、10年は91.8%

図1 12月時点における内定率の推移

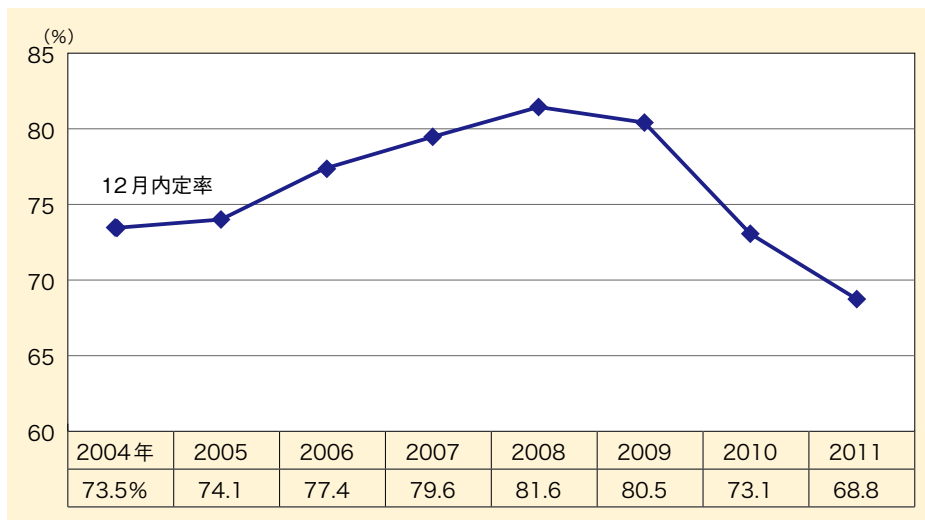
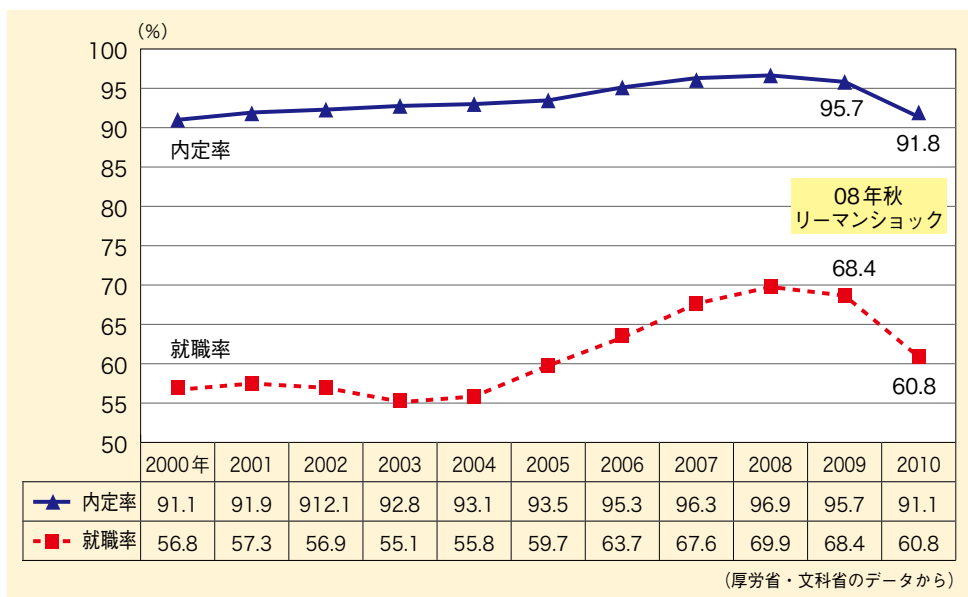


図2 内定率と就職率の推移(最終確定)



→60.8%という数字になる(図2)。そして、今春の卒業生の場合、このままで行くと、最終の内定率が90%を切り、就職率も60%に達しないのは確実と言えるだろう。もちろんこれは統計を取るようになって初めてのケースで、2000年前後の「就職氷河期」にも見られなかった数字である。

団塊の世代の大量退職や景気の持ち直しによって、一時期大学生の就職も上向きと言われていたのが、08年のリーマンショックを境にまた暗転した。このように大学生の就職は常に景気の動向に振り回され、それは運・不運としかいいようがない面がある。就職が厳しくなると企業の人事担当者や評論家が、学生の社会常識の不足、意欲の欠如などを言い出すが、私には当事者である学生の現実とかけ離れた傲慢な発言としか思えないことが多い。そうした学生もいるだろうが、買い手市場になると急に高飛車になる企業の態度ももっと問題にされるべきだと思う。

また既成の大手メディアの報道姿勢にも問題がある。学生の就職状況を正確に伝えるには、就職率をベースにすべきなのに、なぜか大手メディアはいつも内定率を使って報道する。そのため、本当の深刻さがいまひとつ伝わってこない。「超氷河期」などという言葉遊びをしている状況ではないはずだ。

●内定のピークは4年生になったばかりの4月で、 シュウカツはネットが中心

今の大学生の就職活動(シュウカツと言われる)がどのように行われているのを見よう。

ふつう、学生が本格的に活動を始めるのは、3年生の夏休み明け10月くらいからだが、今年度はもっと早くなっているだろう。この時期になると、否応なしにキャンパス全体が就職に向かって動き出していく感じになる。マスコミや外資など早いところでは、年末から年明けの1月末ごろに企業の説明会やセミナーが始まり、学生は志望する企業にエントリーして顔を出す。まだ4年生になる前の3年生3月にはもう本番で50社以上エントリーする学生も珍しくない。1日に2社は面接を受けるといふシュウカツ中心の生活が始まり、学生たちは連日情報交換や、就職サイトでチェックしながらスケジュールをこなしていく。内定のピークは4年生になっ

図3 大学生の就職活動（シュウカツ）の流れ

- *現在の就職活動はインターネットを介して行われる
- *大学生は紙の媒体はほとんど利用しない
- *就職課の果たす直接的な役割は昔よりずっと小さくなっている
- *大学生はネット上で説明会へのエントリーを50社以上行い、実際に20~30社は受ける



たばかりの4月~5月。6月に入ると焦りだす学生も出てくる。ここで決まらないとシュウカツが長期化する可能性があるからで、「早期化」と「長期化」がキーワードと言っている。

学生たちに人気のある大手企業も、景気が悪化すると採用数を減らすので、いっそう狭き門になる。面接を数度繰り返す、最後には一対一で長時間かけて専門的な知識を問う企業もあるし、集団討論を課すケースもある。大手人気企業が厳しいにもかかわらず、学生たちは安定を求めてまず大手を目指す。ベンチャー系や中堅企業のな

かにはむしろ人材不足で、この機会に採りたいと考えている企業もあるが、学生の目はなかなかそちらに向かないのが現実。中小は会社がつぶれたり、内定が取り消されたりするのではないかという不安が先立つからで、大手が厳しいからこそ逆を目指すという構図になる。この心情を一概に否定できないと思う。

内定を取れる学生はたくさん取り、取れない学生はいくらやってもダメというようなことがよく言われるが、それは昔話で、現代のシュウカツにおいては一般的と言えない。今の多くの学生はそんな余裕はない。最初の内定が出るまで緊張の日々が続く、一刻も早くシュウカツを終えたいと思っているし、入社後に自分たちを待ち受けている職場がどんなにハードなのかもよく知っている。だから希望に近いところで一度内定が出ると、シュウカツを終える学生がほとんどだ。それ以後は、残りの大学生活を少しでも楽しもうと考える。

現在の就職活動の仕方が、本誌の読者の時代と大きく違うのは、インターネットを介して展開されることである。学生は3年生の秋に、まず就職サイト(企業の就職情報を集めたホームページ)に登録し、その中で自分が関心のある会社名を打ち込み、ヒットしたホームページを見て企業研究をしていく。昔のような分厚い就職情報誌やパンフレットなど、紙のメディアはほとんど使われない。企業にエントリーする場合も、ほとんどがネットを介して行われる。このように就職活動がネット中心になると、大学の就職課の役割や影響も変わっていく。一部の女子大生を除いて、就職課を積極的に活用したという話はあまり聞かなかったし、就職課の存在そのものに疑問を投げかける学生がかなりいるのも事実である。

経済界から、現在の就職のありかたが学業に影響を与えるとして是正しようという動きが出ている。しかし、その内容はいまだ曖昧な部分も多く、それによって大学生の就職が楽になるという見通しは見えてこない。

文/大堀 精一(「学研・進学情報」監修)